

政治・経済

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和6年度（第4回）共通テストの「政治・経済」の問題作成方針は以下のとおりである。

現代における政治、経済、国際関係等について多面的・多角的に考察する過程を重視する。現代における政治、経済、国際関係等の客観的な理解を基礎として、文章や資料を的確に読み解きながら、政治や経済の基本的な概念や理論等を活用して考察する力を求める。問題の作成に当たっては、各種統計など、多様な資料を用いて、様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。

以上のような問題作成方針に基づき作成された問題について評価を実施した。

なお、評価に当たっては、報告書（本試験）14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

出題は「政治・経済」の全分野にわたる総合的な内容で、政治分野の問題では、「平和とは何か」、経済分野の問題では、「経済の仕組みと日本経済の課題」、政治分野と経済分野の融合問題では、「国家の役割と課題」、「産業構造の変化と日本の経済・社会の課題」をテーマとして、政治、経済及び国際関係等の基本的な原理や原則、現代社会の諸課題などについて、多面的・多角的に考察させる問題である。

まず、内容・範囲については、大問、設問ごとに次のとおりである。

第1問 国家の役割と課題

「国家の役割と課題」をテーマにした政治分野と経済分野の融合問題であり、場面設定としては、生徒たちが政治・経済関連の月刊誌を読み、それぞれ関心をもった政治・経済の内容について学習を深めていくというものである。政治・経済に関する基本的な理解を基に、用語では知っているがデータにはなじみのないアメリカの経常収支・貿易収支や民生費の総額・内訳といった資料を素材に考察を深めていく出題形式となっているのが特徴であり、資料を活用した授業改善を促すなどのメッセージ性がある。大問の導入部分は端的であり、各設問の文章、資料等を多くしていることから、多くの受験者にとって解きやすい印象になったと考えられる。全体としての難易度はやや平易である。

問1 ケインズとフリードマンの思想について、基本的な知識・理解を問う、標準的な設問である。

問2 日本の国税について、1990年度と2019年度の内訳を示したグラフの比較を行った上で、消費税、所得税、法人税の特徴の理解を問う二段階構成の設問となっている。知識の理解の質を問う、やや平易な良問である。

問3 日本の財政制度について、知識・理解を問う、やや難易度の高い設問である。

問4 「双子の赤字」について、アメリカの財政収支と経常収支のグラフを読み取って、経常収支や貿易収支の特徴についての知識・理解を問う、標準的な設問である。

問5 NGO（非政府組織）の役割について、基本的な知識・理解を基に資料の内容を読み取る力を問う、やや平易な設問である。

問6 地方財政における民生費について、基本的な知識・理解を基に資料を読み取る力を問う、やや平易な設問である。

問7 安全保障における国際連合の組織の役割について、基本的な知識・理解を問う、やや難易度の高い設問である。

問8 国家が領域に対して持つ国際法上の権利の行使について、資料を読み取った上で、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる、やや平易な設問である。

第2問 「経済の仕組みと日本経済の課題」

「経済の仕組みと日本経済の課題」をテーマにした経済分野の問題であり、場面設定としては、基本的な理論から現代社会の課題までの様々なテーマを提示した、大学の教員による市民講座のプログラムを題材とし、経済に関する基本的な理解を問う問題である。全体としての難易度はやや平易である。

問1 国富について、資産・負債に関する日本の政府統計を基に基本的な知識・理解を問う、標準的な設問である。

問2 循環型社会について、その形成に向けた方策のモデルを示した図を基に基本的な知識・理解を問う、平易な設問である。

問3 国債について、基本的な知識・理解を問う、やや平易な設問である。

問4 FTA（自由貿易協定）やEPA（経済連携協定）について、基本的な知識・理解を問う、標準的な設問である。

問5 国際社会における日本の経済協力の特徴について、基本的な知識・理解を問う、平易な設問である。

問6 外国人との共生社会のあり方について、基本的な知識・理解を問う、標準的な設問である。

問7 食の安心・安全を守る制度について、基本的な知識・理解を問う、平易な設問である。

問8 社会保障制度の誕生とその展開について、基本的な知識・理解を問う、やや平易な設問である。

第3問 「平和とは何か」

「平和とは何か」をテーマにした政治分野の問題であり、場面設定としては、大学のオープンキャンパスに参加し、模擬授業「平和とは何か」を受けた生徒たちが、模擬授業後、平和をめざす思想・制度の発展、「武力紛争のない状態」としての平和（「消極的平和」）や「差別や貧困のない状態」としての平和（「積極的平和」）の分野について、さらに関心を持って調べたり、模擬授業で配られた資料をみながら活動したりしたことを題材としている。全体としての難易度は標準である。

問1 日本国憲法における天皇に関する規定について、基本的な知識・理解を問う、標準的な設問である。

問2 第二次世界大戦後に起こった国家が関与する武力紛争について、資料を読み取る力及び基本的な知識・理解を問う、標準的な設問である。

問3 国連平和維持活動（PKO）について、知識・理解を基に資料を読み取る力を問う、やや難易度の高い設問である。

問4 日本の国会について、基本的な知識・理解を問う、標準的な設問である。

問5 日本における差別の解消に関連する法律について、知識・理解を問う、やや難易度の高い設問である。

問6 法律の規定を違憲と判断した日本の最高裁判所の判例について、知識の理解の質を問

う、やや難易度の高い設問である。

問7 人権保障に関する条約について、基本的な知識・理解を問う、標準的な設問である。

問8 「南北問題」や「南南問題」について、基本的な知識・理解を問う、やや難易度の高い設問である。

第4問 「産業構造の変化と日本の経済・社会の課題」

「産業構造の変化と日本の経済・社会の課題」をテーマにした、政治分野と経済分野の融合問題である。場面設定としては、生徒たちが、このテーマについて探究を行い、まとめを発表するというものである。「課題の設定」、「資料の収集」、「整理と分析」とその相互の関連、「まとめと発表」という、探究の概要を示した図を題材としており、生徒の探究の在り方のモデルケースを示している。日本経済が長期にわたって陥っている低成長の状態から脱出するために必要な取組みを、多面的・多角的に考察させる場面設定であり、知識・理解を問う設問が多いが、資料の読み取りをとおして思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問もあり、全体としての難易度は標準である。

問1 知的財産権の保護の必要性について、基本的な知識・理解を基に会話文を読み取る力を問う、標準的な設問である。

問2 産業構造や産業の在り方の変化について、第二次世界大戦後の日本の産業構造に関するメモと図とを読み取った上で知識・理解を問う、標準的な設問である。

問3 2002年の道路運送法の改正とその影響や関連する法律について、資料を読み取る力を問う、やや平易な設問である。

問4 企業の生産拠点の海外移転に伴う輸出入の増減と、そのことに起因する貿易収支について、基本的な知識・理解を基に資料を読み取って、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる、やや難易度の高い設問である。

問5 日本におけるベンチャー企業について、基本的な知識・理解を問う、やや平易な設問である。

問6 イノベーションを促進するための各種の法制度や政策について、時事的な要素を含む知識・理解を問う、標準的な設問である。

以上の内容から、設問の内容は適切で、学習指導要領の定める範囲で出題されており、出題内容に大きな偏りはなかったと考える。また、第1問の間2や第3問の間6のように、知識の理解の質を問う設問、さらには、第1問の間5、間6、第3問の間3、第4問の間1のように、知識・理解を基に資料や会話文の内容を読み取る力を問う設問、第1問の間8や第4問の間4のように、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問など、難易度のバランスに配慮した適切な出題が行われたと判断できる。一方で、出題形式としては、資料の読み取りも多く出題されていたが、読み取ったことを活用して知識を深める問題があまりみられなかったことや、第2問では、単純に知識を問う問題が連続したことなど、全体的に問題文から直接、知識・理解を問う設問が多く、思考力・判断力・表現力等を発揮して解く設問にはなっていなかったといえる。

3 分量・程度

追・再試験の設問数は30問で、本試験と同数であり、分量は適切であると評価できる。文字数については、全体としては適切な分量であったが、探究型の設問において文字数が多い設問もみられた。

問題の難易度については、基本的な知識・理解を問う設問や知識・理解を基に資料を読み取る設

問が多く、思考力・判断力・表現力等を発揮して解く設問が少なかったといえる。全体としてやや平易な印象を受ける。ただし、モデルを示した図や時事的な内容と組み合わせて解答させるなどの工夫がなされている設問もみられた。基本的な知識・理解のみを問う設問が多く、受験者としては解きやすかったと考えられるものの、受験者の思考力・判断力・表現力等を十分に問う試行的な設問はみられなかった。知識・理解を問う設問と思考力・判断力・表現力等を発揮して解く設問とのバランスがとれた出題を期待したい。

4 表 現・形 式

問題の場面設定については、生徒たちがそれぞれ、月刊誌を読んで関心を持った内容について調べる場面、参加した大学教員による市民講座で学んだ内容についてさらに調べる場面、オープンキャンパスの模擬授業で学んだ内容についてさらに調べる場面、「産業構造の変化と日本の経済・社会の課題」というテーマで探究を行う場面など、社会の問題に対して生徒が主体的に取り組む場面設定が多かった。現代社会の諸課題について主体的に考察させ、公正な判断力を養い、良識ある公民として必要な資質・能力と態度を育てるという「政治・経済」の科目の目標に照らして適切であったと考えられる。ただし、各大問の場面設定は工夫されているが、用語の引き出しに止まっており、各設問で活用されていない。一方で、各設問には、第3問の間2や第4問の間2のように、素材であるメモやグラフがないと正答が導けないという出題をするなどの工夫がみられた。また、第1問の間2のように、解答にたどり着くまでに二つの段階を経ることで知識の理解の質を問う設問もみられた。このように「政治・経済」が育成を目指す資質・能力や授業改善について、高等学校の教育現場に向けてのメッセージ性もあったといえる。ただし、第4問に課題を発見し解決するプロセスが示されていないが、合意形成や課題解決のプロセスを問う形式の設問はみられなかった。大問の導入部分と各設問との関連性をより一層持たせることで、授業改善へのメッセージ性の強い設問に工夫することが必要と考える。

設問形式については、選択肢の数は、4択13問、6択6問、7択8問、8択3問であり、適文選択と誤文選択のバランスは、適文選択が28問、誤文選択が2問である。また、第1問の間5、第2問の間7のように正しいものの組合せをすべて選ばせる設問が8問あり、第1問の間1、第2問の間1のように複数の解答のすべてで正解することを求める設問が16問ある。このように選択肢の数も含め設問形式の多様化などに工夫がみられる。誤文選択も2問程度で、受験者にとってわかりやすい形式であったが、組合せは単純なものが増加する一方、昨年度よりも正しいものの組合せをすべて選ばせるという形式が増えたことで全体的に正確な知識・理解を求めるものとなっている。また、本試験と比較すると、資料から読み取ったことを基に思考力・判断力・表現力等を発揮して解く設問が少なくなっており、知識・理解が問われる設問が多い印象がある。

配点については、探究活動の過程において、資料の内容を読み取った上で、正確な知識・理解を問う設問の配点や、少ないながらも解答に当たって知識のみならず思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問の配点が大きくなっており、適切であると考ええる。

文章表現・用語や図表の取扱いについては、受験者が問題を理解しやすいように工夫されており、適切であったと考える。

5 ま と め（総括的な評価）

共通テストの4回目となった本年度の追・再試験の問題は、大問全体の設定を、政治的分野から経済的分野、国内の問題から国際社会の問題に反映させる工夫がみられるとともに、生徒の学びの場を学校以外の場面に求める設定が多くなっており、そこで学んだことを基に主体的に活

動する学習過程を意識した場面設定がなされている。第1問では生徒が読んだ月刊誌の表紙から、政治的分野、経済的分野において関心を持った内容を主体的に学ぶことができることを示している。第2問と第3問の場面設定は大学の教員による市民講座や大学のオープンキャンパスにおける模擬授業になっており、大学における学びを意識した高校生に対して、大学での学びは様々なテーマがあり、それぞれのテーマにおいて、多面的・多角的な視点で大学では授業が行われていることを示しており、そのような学びの視点を高等学校の授業においてももつことが大切であることが示されている。第4問では、授業で行った探究のまとめを発表する場面をとおして、探究における課題の設定からまとめと発表までの取組みが示されている。「政治・経済」の授業における探究の一つのモデルケースとして、このような生徒の活動が高等学校に求められていることを強く感じ取ることができる。

大問の導入部分においては、生徒の主体的な学習の場面が設定されているが、第2問のように各設問のテーマが演題として示されていると、一つの大問の中で多種多様なテーマでの出題が容易となるが、大問全体の統一感が希薄になることは否めないと思われる。また、第4問の「探究の概要」に示されている、「資料の収集」と「整理と分析」の段階が繰り返される学習過程を踏まえて思考力・判断力・表現力等を問う設問や、「まとめと発表」の段階に至るまでの課題解決に向けた合意形成のプロセスを問う設問は、今回の出題ではみられない。探究という場面設定を活かし、課題を解決する過程における、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問を期待したい。